
トナカイのエルン

大平麻由理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トナカイのエルン

【Zコード】

Z6307F

【作者名】

大平麻由理

【あらすじ】

トナカイのエルンは、風邪をひいたミスター・サンタのことが心配でしかたありません。明日はクリスマスだというのに、プレゼントのことも気になります。エルンと、サンタ。そして森の動物たちとのふれあいをほのぼのと描きます。

トナカイのヘルン 前編

「ヘルン、ヘルンや。『じせつ』、『じせつ』」

ミスター・サンタは苦しそうに、トナカイのヘルンをよびました。

「ミスター、どうしたのですか？」

トナカイのヘルンは、からだを左右にゆすってせなかの雪をはらいのけながら、ミスター・サンタのねでいるベッドのところにやりつてきて、たずねました。

「どうやらわたしは、かぜをひいたみたいでね。『じせつ』、『じせつ』」

「ミスター、だいじょうぶですか？　どこか痛いのですか？　それとも苦しいのですか？」

ヘルンは心配そうにミスター・サンタをのぞきこみ、じまんの鼻をひくつと動かしました。

「『じ』も痛くはないけれど、『じせつ』、『じせつ』。息が苦しくて、熱があるみたいなんだ。せんねんだが、今夜の『じ』とは、できやうになによ、『じせつ』、『じせつ』」

ミスター・サンタは、まつ白なりつぱなひげを、毛布の中に半分かくしながら、そう言いました。

「それはたいへんです。『じ』じより、『じ』じより。あしたはクリスマスなのに。森じゅうの動物たちも、村のじどもたちも、みんな、あしたを楽しみにまつてしているのに。ミスターが行かなければ、プレゼントはどうなるのですか？　朝おきたら、からっぽのくつしたがぶらさがつたままなんて、かわいそうじやないですか？」

ヘルンは、今にも泣きだしそうです。

まつかな鼻をますますまつかにして、とうとうがまんができなくなったのか、大つぶのなみだをぽとと石のゆかにおとしました。

なみだは『じ』じより『じ』じより、だんらのと『じ』じよりで『じ』じよりがつてゆきました。ほとん、ほとんとおちては『じ』じより、またおちては『じ』じより。

そして、そのなみだのつぶは、大きなひとつつのボールのよつなか
たまりになつて、だんろのほのおに向かつてどびこみました。おや
おや、火がきえてしまつたようです。

エルンは大あわてで火をおこしました。かべきわにつんであるま
きをくべて、どんどんもやします。

「ミスター、ごめんなさい。ぼくが火をけてしまつたから、へや
の中がわむくなつてしまつました。まさかぼくのなみだのせいでき
えてしまつなんて、思つてなかつたからです。ほんとうに、ごめん
なさい。ごめんなさい……」

エルンはミスターサンタになんども謝りました。でも、ミスター
サンタはなにもいいませんでした。

ねむつて いる よう です。ときどき、苦しそうな顔をしながらも、
まぶたをしつかりと閉じていました。

「そうだ！」

エルンは、なにかを思いだしたよつにすくつとかおを上げ、まば
たきを3かいすると、パンと手を1かいたきました。

「ミスター、ちょっと行つてきます。しばらくそのまままで、待つて
いてくださいね」

ねむつて いる ミスターサンタに なつと 声をかけました。

外は朝からずつと雪がふり続いています。トナカイのエルンはふ
るぶるつと鼻をふるわせ、まつ白な雪の道をまっすぐ歩いて、タ
ぐれのせまる森の中にきえてゆきました。

エルンは、もみの木がいっぱいはえて いる 森の中を歩いていました。

その間も、雪は降り続いて います。形のいいツノにもせなかにも、
どんづん雪がつもつて います。

「手も足もつめたいなあ。でも、ミスターはもつと苦しいんだ。こ

れくらいがまんしないといけないよね。それから家のベアールの家が見えてくるはずなんだけど……」

エルンはまつ毛にのった雪をふるい落とし、あたりを、きょりきょろと見回しました。

すると、森の中でもひときわ大きな家が木と木の間に見えてきました。あそこにちがいありません。

エルンは、まどから明かりがもれている大きな家に向かって、走り出しました。

家の前にやつてみると、トントントンと、がんじょ、うわうわ、アをたたきました。

へんじがありません。

エルンはもうこちび、トントントンとドアをたたきました。のっしのっしのっしと、家中から重たい足音が聞こえています。まどもみしめしふるえています。

その時、エルンの頭の上の木から、雪がドサッとおちてきました。でも、そんなことなど、まったく気になりませんでした。

「あ、ベアールだ」

エルンは、それがベアールが起きてきた合図だと、すぐにわかりました。ドアがぎいっとあいて、中からベアールがのっそりと顔をのぞかせました。

「誰だい？ こんなに寒い日にやつてるのは、ふわあーお

ベアールが眠そうな目をこすりながら、大きなあくびをしました。「ぼくです。トナカイのエルンです。ねむっているところを起こしてしまってごめんなさい。お願いがあつて、やつてきました」

エルンは頭の上にびつたと雪をのせたまま、ベアールをまつすぐ見て言いました。

「それならしかたないね。さあ、寒いから中に入つて。やつやつ、頭の上の雪も忘れずに落としてくれよ。さて、いつたい、何があつたんだい、ふわあーお」

ベアールは木のいすにすわって、また大きなあくびをしました。

エルンもとなりのいすにすわり、ベアールがねむつてしまわない

ように、大きな声で、ミスター・サンタのことを話し始めました。

「大変なんです。ミスターが、かぜをひいたので、今夜の仕事がで

きなくなつてしまつたんです。ベアール、お願いです。どうしたら

いいか、いつしょに考えてください」

ベアールはびっくりして目をまんまるに開き、ぎしづと床の音を

きしませながら、立ち上りました。

「なんだつて！ それはたいへんだ。子供もたゞじにプレゼントがと

どけられないじゃないか！」

もうベアールは、あくびなんかしていません。エルンもいつしょ

に立ち上がつて、うんとうなずきました。

「よし！ いいことを思いついたぞ。ちょっと待つてくれるかい

？」

ベアールは、部屋中をぐるぐると歩き回り、何かをさがしています。

そして、指をパチンとならし、あそこだと言つて、台所のたなに手をのばして、つぼを取り出しました。

「このハチミツをあげるよ。ミスターに食べさせてあげるといい

「ありがとう、ベアール。これを食べるといいんだね？」

「そうだ。栄養たっぷりだから、きっと元気になるよ」

ベアールにもらつたハチミツをかかえて、エルンは外に出ました。

「ベアール、どうもありがとう。それじゃあ、またね」

エルンはベアールに手をふりました。ベアールもまた大きなあくびをしながら、手をふっています。

エルンは、まつ白な雪の道を森のおくに向かつて、じんじん歩いて行きます。

そして、雪の降り続く森の中に、さへてゆきました。

エルンは、ベアールにもりつたつぼを雪から引み取り抱えながら、森の中を歩いていました。

雪はまだ止みやうにあります。頭にのった雪をこぼりまくり落としても、またすぐにつもつてしまします。

それでもエルンは、からだじゅうが冷たくて寒いのをじらえて、歩き続けました。

「どんどん寒くなつてくるよ。ドサ、//スターまわつと折つてんだ。これくらいがまんしないといけなことよな。そろそろやがれのメアリーの家が見えてくるはずなんだけど……」

エルンは寒さでじんじんする足を、雪の上すべりまくらしきあたりを、さよないきよりと巡回しました。

すると、白い屋根のかわいい家が、木と木の間に見えてきました。あそこにはちがいありません。

エルンは、えんとつからけむりがもくもくと出でるかわいい家に向かつて、走り出しました。

家の前にやつてみると、トントンタントンヒ、まるご形の木のドアをたたきました。

へんじがあります。

エルンはもうこちび、トントントントンヒドアをたたきました。といとい、といといつて、家のなかから小さな足音がこくつも聞こえてきます。まどから誰かが顔を出してこちらを見てくるようです。エルンはその子に向かつてにっこり笑いかけました。するとその子はびっくりしたような顔をして、すぐに首をひつじめてしましました。

しづめじゅじゅじゅじゅがきこつとあこて、中からメアリーヒ、3回の子やぎがひょひょと顔をのぞかせました。

「誰なの? こんなに寒じ日にやつてくれるの? ふるふる」

メアリーが、寒そり、からだをぶるぶるとふるわせました。子

どもたちも同じようにぶるぶるとふるえていました。

「ぼくです。トナカイのエルンです。びっくりせんせーいめんなさい。お願いがあつて、やつてきました」

エルンは頭の上にびっかりと雪をのせたまま、メアリーをまつすぐに見て言いました。

「それならしかたないわね。さあ、寒いから中に入つてちょうどいい。そうそう、頭の上の雪も忘れずに落としてね。わーて、いつたい、何があつたの、ぶるぶる」

メアリーは子どもたちといっしょに干草の上にすわって、またぶるぶるとふるえました。

エルンもとなりにすわり、メアリーと子どもたちに、ミスターサンタのことを話し始めました。

「大変なんです。ミスターが、かぜをひいたので、今夜の仕事ができなくなってしまったんです。メアリー、お願いです。びっしだらいいか、いつしょに考えてください」

メアリーはびっくりして田をぱちくつとさせ、がさがさつと干草をかきわけて、立ち上りました。

「なんですか！ それは大変だわ。子どもたちにプレゼントがとどけられないじゃないの！」

メアリーの子どもたちまで、いっしょに田をぱちくつとせています。

エルンもいつしょに立ち上がつて、うんとうなづきました。
「せうだわ！ いこ」と思つて、ちょっと待つてくれるかしら？」

メアリーは台所のたるから何かをくんで、ビンにつめました。それはまつ白な水のようなものでした。

「このミルクをあげるわ。ミスターに飲ませてあげてね」「ありがとうございます、メアリー。これをのむといいんですね？」

「そうよ。栄養たっぷりだから、きっと元気になるわ」

メアリーにもらつたミルクのビンをかかえて、エルンは外に出よ

「つとしました。

すると、子どもたちが、やつやべマールにもらったつばをじっと見ていました。

「君たち、 Irene がほしこの？」

エルンは子どもたちに聞きました。

「うん」

と、3回の子やせが、声をそろえて言いました。

エルンはしびりく考えたあと、そのつばをメアリーにわたしました。

「これはベアールにもらったハチミツです。子どもたちに食べやめてあげてください」

「あら、いいのかしら?」

メアリーは心配そうな顔をして、エルンに聞きました。

「ミルクがあるからだいじょ「づぶです。メアリー、じつもありがとう。それじゃあ、またね」

エルンはメアリーに手をふつました。メアリーもまたふるふるふるえながら、手をふっています。

エルンは、まつ白な雪の道を森のおくに向かって、じょじょ歩いて行きます。

そして、雪の降り続く森の中に、食べてゆきました。

エルンは、メアリーにもらったびんを両手でしっかりと抱えながら、森の中を歩いていました。

雪はどんどん空から舞いおちてきます。もつすでにエルンのわざがかくれるくらいにまで、積もってこます。

それでもエルンは、どんなに歩きにくくても、止まらずに進んで行きました。

「ヒーヒーヒシノガコロヒトしましたみたいだよ。なんて寒いんだろ

う。でも、ミスターはもつと苦しいんだ。これくらいがまんしないといけないよね。そろそろきつねのフォクシースの家が見えてくるはずなんだけど……」

エルンは肩にのった雪をぱらこ落とし、あたりを、きょろきょろと見回しました。

すると、森の中でもひときわおしゃれな家が木と木の間に見えてきました。あそこにちがいありません。

エルンは、まどからレースのカーテンが見えてくるおしゃれな家に向かって、走り出しました。

家の前にやつてみると、トントントンと、それいなステンドグラスのついたドアをたたきました。

へんじがありません。

エルンはもうこねび、トントントンヒドアをたたきました。ことじとことじとと、家中から軽やかな足音が聞こえてきます。レースのカーテンもひらりとゆれました。

「あっ、フォクシースだ」

エルンの思つたとおりです。ドアがすーっとあいて、中からフォクシースのふわふわのしつぽが見えました。

「誰？ こんなに寒い日にやつてくるのは、ふわふわ

フォクシースがじまんのしつぽをふわふわさせながら、エルンに言いました。

「ぼくです。トナカイのエルンです。こんなおやくにおじやまして『めんなさい』お願いがあつて、やつてきました」

エルンは頭の上にびつたらしく雪をのせたまま、フォクシースをまっすぐに見て言いました。

「それならしかたないわね。さあ、寒いから中に入つてちょうだい。そうそう、頭の上の雪も忘れずに落としてくれなきや。えつといつたい、何があったのかしら、ほわほわ」

フォクシースは片手に泡だて器を持ちながら、しつぽを優雅に左

右に振り、エルンを部屋の中に招き入れました。

テーブルの上には、焼きたてのパンケーキがのっていました。とてもいいにおいです。

エルンは、パンケーキに見とれてしまわないように、コホンとせきばらいをひとつして、ミスター・サンタのことを話し始めました。「大変なんです。ミスターが、かぜをひいたので、今夜の仕事ができなくなってしまったんです。フォクシーヌ、お願いです。どうしたらしいか、いつしょに考えてください」

フォクシーヌはびっくりして耳を立て、しつぽをすくい速さでぐるぐる回し始めました。

「なんですって！ それは大変。子供もたちにプレゼントがどうなられないじゃない！」

フォクシーヌは、泡だて器をテーブルに置き、うでを組んで、じつと何かを考えていました。

「そうだわ！ いいこと思いついた。エルン、これを見て」
フォクシーヌは、テーブルの上のパンケーキののったお皿を持ち上げて、エルンの顔の前に近づけました。

「このパンケーキをあげるわ。ミスターに食べさせてあげてね」「ありがとうございます、フォクシーヌ。これを食べるといいんですね？」

「そうよ。材料にたまごとミルクを使っているから栄養たっぷりなの。きっと元気になるわ」

フォクシーヌが用意してくれたパンケーキの入った袋をかかえて、エルンは外に出ました。

「フォクシーヌ。君の食べる分がなくなってしまいましたね。そうだ。これは、メアリーにもらつたミルクです。パンケーキを焼くのに使ってください」

エルンは、ミルクの入つたびんをフォクシーヌに渡しました。「あら、もらつてもいいの？」

フォクシーヌは不思議そうな顔をして首をかしげています。

「パンケーキがあるからだいじょうぶです。フォクシーヌ、どうも

ありがとう。それじゃあ、またね

エルンはフォクシーヌに手をふりました。フォクシーヌもふわふわのしっぽをふりながら、またねと言いました。

エルンは、まっ白な雪の道を森のおへに向かって、じんじん走って行きます。

そして、雪の降り続く森の中に、きてゆきました。

トナカイのエルン 前編（後書き）

こんにちは。童話では初めての投稿になります。
短い連載になりますが、どうぞよろしくお願ひします。
下にありますNEXTボタンをクリックしていただくと後編に移動
します。

エルンは、フォクシースにもらったパンケーキの入った袋をかかえて、森の中を歩いていました。

雪はまだまだふり続いています。道がどこだかわからいくらい雪が積もっているので、まよわなによつに、木の形をたしかめながら進んで行きました。

「まつ毛も鼻も手も足もこおつてしまつたみたいだよ。なんて寒いんだろう。でも、ミスターはもつと苦しいんだ。これくらいがまんしないといけないよね。そろそろリストのクルリンの家が見えてくるはずなんだけど……」

エルンは鼻にのつた雪をふり落とし、あたりをきょろきょろと見回しました。

すると、森の中でもとても小さい家が、木のえだの上に見えました。あそこにちがいありません。

エルンは、ドアもえんとつも、何から何まで全部小さい家に向かつて、走り出しました。

エルンは袋をわきにかかえ、じょうえた手をこすり合わせて、指先をあたため直しました。

やつとのことで、木の上にのぼつたエルンは、トントントンと、木の実のリースがかざつてあるドアをたたきました。

へんじがありません。

エルンはもういちど、トントントンとドアをたたきました。つつつつつと、家中からかすかな足音が聞こえきます。リースのベルがちりんとなりました。

「あつ、クルリンだ」「ほつとひと安心です。

こんな高いところまでのぼってきたのに、クルリンに会えなかつ

たら、エルンはどれほどがっかりしたでしょう。

ドアが力チャッとあいて、中からクルリンが顔をのぞかせました。

「誰？ こんなに寒い日にやつてくるのは。クルクル」

クルリンが床からジャンプして、ぐるりと一回転しました。

「ぼくです。トナカイのエルンです。こんなおそくにおじやましてごめんなさい。お願ひがあつて、やつてきました」

エルンは頭の上にびつたりと雪をのせたまま腰をかがめ、クルリンをまっすぐに見て言いました。

「それならしかたないね。さあ、寒いから中に入つて。やうやう、頭の上の雪も忘れずに落としてよ。わーーと……。いつたい、何があつたの？ クルクル」

クルリンは本を持ったまま、ぴょんとジャンプして、今度はくるりくるりと2回転しました。

エルンは低くかがんだまま部屋の中に入りました。立ち上るとツノが天井にささつてしまふので気をつけなければいけません。

クルリンの部屋には本がたくさん並んでいました。

エルンは、クルリンがとても勉強家なのを思い出しながら、ミスター・サンタのことを話し始めました。

「大変なんです。ミスターが、かぜをひいたので、今夜の仕事ができなくなってしまったんです。クルリン、お願ひです。どうしたらいいか、いつしょに考えてください」

クルリンはびつくりして小さな手をぱちぱちとまばたきしました。そして、くるりくるりくるりと3回転しました。

「なんだつて！ それは大変だ。子どもたちにプレゼントがどうられないじゃないか！」

クルリンはジャンプを止めて、指をおでこにあてながら、むむむとつぶやきました。

「そうだ！ いいこと思いついたよ。エルン、ちょっと待つてて」

クルリンはまどろみにある机に向かつてすわり、ペンをにぎつて、すらすらと何かを書き始めました。

「これでよし。」この手紙を、フクロウのホーリーのところに持つて

行くといいよ」

「ありがとう、クルリン。これを持って行くといいんですね？」

「そうだ。ホーリーならミスターの力になれるよ。きっと元気になると

る」

クルリンが書いてくれた手紙を持ってエルンは外に出ました。

「クルリン。勉強のじゅまをしてごめんなさい。そうだ。これは、フォクシーヌにもらったパンケーキです。勉強のとちゅうでお腹がすいたら食べてください」

エルンは、パンケーキの入った袋をクルリンに渡しました。

「えっ？ こんなにたくさん？」

クルリンはうれしそうに袋の中をのぞきました。

「この手紙があるからだいじょうぶです。クルリン、どうもありがとう。それじゃあ、またね」

エルンは、ゆっくりと木から下りると、クルリンに向かつて手をふりました。

クルリンも手をふりながら、また1回転しました。

エルンは、まつ白な雪の道を、森のおくに向かつて、どんどん歩いて行きます。

そして、雪の降り続く森の中に、帰ってきました。

エルンは、クルリンに書いてもらつた手紙を持って、森の中を歩いていました。

いつの間にか雪はやんだようです。空を見上げると、雲が切れて、星がまたたいしているのが見えました。

最後に残つていた雪雲もどこかに消えてしまい、月が顔を出しました。

月に照らされて、森じゅうが、やみの中にキラキラ輝いています。

エルンは立ち止まって森のおくを見ました。右側も見ました。左側も見ました。今、歩いて来たばかりの道もふり返りました。

大変です。ホーリーの家がどこにあるのか思い出せません。エルンはツノを何度も見て、空を見上げて考えました。

「そうだ。今、思い出したよ。ぼくは、ホーリーの家に行つたことがなかつたんだ。だから家がどこにあるのか、知らない。どうしよう。クルリンの家までもどつて、たずねたほうがいいのかな」

エルンは自分の足跡のついた道を引き返そうと、ぐるっとからだの向きを変えました。すると、誰かが呼んでいる声が聞こえます。

「エルン、エルン。道に迷つたのですか？ ホー ホー」

ちょうどエルンの目の前にある木の枝に、くじくじの田をした丸い鳥がとまっているのが見えました。

「あなたは、もしかして、フクロウのホーリーですか？」

エルンは丸い鳥に向かつて言いました。

「はい、そうです。わたしはホーリーです。雪がやんだので、配達がてら森の様子を見に行くところだったのですよ、ホー ホー」

「あの……。リスのクルリンに手紙を書いてもらいました。これをあなたに持つて行くようにと言われて」

エルンは手を伸ばして、手紙をホーリーに渡しました。

「どれどれ。なんて書いてあるのかしら」

ホーリーは羽の中から取り出した赤いめがねをかけました。そして、月の明かりをたよりに、手紙を読み始めました。

「ふむふむ。おやおや。それは大変。ミスターがかぜをひいてしまつたのね。わたしの仕事は郵便配達。世の中の出来事は手紙でしか信じないので。うわさ話はもうこりそり。クルリンの手紙は世界中で一番信用できるわ。さあ、行きましょう。ミスターの家はここからだとずいぶん遠いはず。急いで！ ホー ホー ホー！」

すると、あっちからも、こっちからも、丸いからだのフクロウが、たくさん飛んできました。

1羽、2羽、3羽。4羽、5羽、6羽。まだまだ飛んできます。
7羽、8羽、9羽。10羽、11羽、12羽……。もう、数えられません。

エルンは、木の枝にところ狭しとまつているフクロウを見て、目を丸くしました。

「なんて、いっぽいいるんだう。ホーリー、仲間を集めて、どうするのですか？」

エルンは不思議で仕方ありません。

「エルン。そんなことは気にしなくてもいいから。ミスターが待つてるのでしょ？みんなも、用意はいいわね。ミスターの家まで全速力で行くわよ」

ホーリーは仲間にそう言つて、びゅんと飛び立ちました。仲間たちも、後について一斉に飛び立ちました。

エルンもほんやりしていられません。足首をくるくると回して、準備運動をした後、ミスターの待つ家に向かつて、雪の上を田にもとまらぬ早さで駆けてゆきました。

ミスター・サンタのそりをひく時よりも、ずっと早く走りました。

そして、エルンはやっと、ミスター・サンタの待つてゐる家にもどつて来ました。ホーリーと仲間たちは一足早く着きました。エルンはふらふらになりながら、ミスター・サンタのそばに近寄りました。どうやら、まだ眠つてゐるようです。

「エルン。プレゼントはどこにあるの？」

一緒に部屋に入ってきたホーリーがききました。

「ぼくが、いつも、寝ている小屋の裏の。ふう。倉庫においてあります。ふう。ホーリー。そんなことをきて、いつたい、ビッグするつもり、ふう。なのですか？」

エルンはあまりにも大急ぎでここまで帰ってきたので、何度も大きく息をしながら、とぎれとぎれにしか答えられません。

「わかつたわ。裏の倉庫ね。エルン。あなたは、まきをどんどん燃やして、ミスターの看病をするのよ。ミスターの田が覚めたら何か食べさせてあげなさい。いい？ わたしは仲間たちと一緒に、プレゼントを配つて来るから……」

そう言つて、ホーリーは部屋から飛び出していました。
次の瞬間、パタパタと大きな羽音がしたかと思うと、すぐにありました。りはいつものように静かになりました。

エルンはホーリーに言われたとおりに、まきを燃やして、部屋を暖めました。そして、お鍋に残っていたスープも温めて、夜中に田が覚めたミスター・サンタに飲ませました。

小鳥の声がチチチチと聞こえてきます。窓からは、まぶしい光が差し込んでいました。

「ああ、よく寝た」

エルンは腕をのばして、のびをしました。

「あれ？ ここは……？」

エルンは腕をのばしたまま、あたりを見回しました。田の前には、ミスター・サンタが眠っています。エルンはミスター・サンタのベッドの前でうたた寝をしていたことに気付きました。

「たいへんだ！ お日様が出てるってことは、もう朝になってしまつたんだよね。ぼくは、ミスターの看病をしていて、そのままここで眠つてしまつたんだ。どうしよう。どうしよう。今日はクリスマスなのに、子どもたちにプレゼントを配るの、忘れてしまつたんだ」
エルンはあわてて立ち上がり、玄関のドアのところに行きました。今からでも、自分ひとりでプレゼントを配らうと思つたからです。すると、ドアのすき間に何かがはさまつていてるのが見えました。

手紙です。

『エルンへ』

そう書いてあります。

エルンは、大急ぎで封筒を開けて読み始めました。

『ミスターの具合はいかがですか？ エルンも、疲れてはいませんか？ プレゼントはちゃんと子どもたちに届けましたよ。安心してください。そうそう、今朝は森のみんなからエルンに渡してくれと次々とクリスマスカードを預かっています。あとで届けに行きますね。それでは、素敵なクリスマスを。ホーリー・ヨリ』

エルンは思い出しました。タベ森のみんなに相談して、最後にフクロウのホーリーに助けてもらつたことを。

エルンは、手紙を胸に抱きしめて、優しかったみんなのことを順番に思い浮かべました。

そして、ベッドの上に起き上がり、にっこり笑つて『ミスター・サンタに言いました。

「メリークリスマス、ミスター・サンタ」と。するとミスター・サンタも言いました。

「メリークリスマス、ミスター・エルン」と。

エルンは、生まれて初めてミスターと呼んでもらつて、うれしくて、そしてちょっとぴり恥ずかしくなつて、じまんの鼻を、ぽりぽりとかきました。

トナカイのエルン 後編（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

この『トナカイのエルン』は、絵本のイメージで書きました。バス
テル画でも添えて、レイアウトできればいいなと思っています。
ではみなさまも、素敵なクリスマスをお過ごしになつてくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6307f/>

トナカイのエルン

2010年10月8日15時11分発行